

とある少女の物語

MトK

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

プロローグ見てほしいです。 あと不定期更新かも 処女作 感想や意見があれば感想受付へ 拙い字拙い字拙い字注意

目次

プロローグ	1
第一話	4

プロローグ

「神戸市」それは人口300万人の新興都市。9つの区に分かれおり、都市開発が進み交通網が発達している一方で街その物の歴史は古く、城趾や古い街並みなどが現存する。これはそんな神戸市で起こる物語。

現在、神戸市新西区のみかづき荘と呼ばれる2階建ての洋風でおしゃれな下宿屋に少女が2人集まっていた。七海やちよと梓みふゆの2人である。

「もうちよつと待っていてちょうだい、後少しで着くつて今メールが来たわ」

「分かりました、ではこの間の魔女との戦い方について分析するのはどうでしょう?」

「賛成よ」

そう言ったやちよは遠い目をして今日来るもう一人の魔法少女について少し考えていた。

感神ころろは4年前にこのみかづき荘の隣に引っ越してきた私達と同じ年の少女である。引っ越しの挨拶の際に私の手にはめられていた指輪を見て彼女が自分の指輪をそつと静かに見せてきたのが私達の出会いだった。

そんな彼女の第一印象はおしとやかで物静かな子だと思っていた。だが、その数日後私と同じ学校に転校生として来ると印象は180度変わった。とても明るくて元気のある子だと思った。私は数日前のあの子と同一人物なのか疑いたくなり、そのギャップに戸惑いながらも本人が話しかけてきたことで少なくとも同一人物であるかは確認できた。

それからは家が隣ということやこころの性格もあつてかどんどん

仲良くなつていった。中学3年には使える時間をほぼすべて一緒にいることに費やした。彼女から私に声をかけ学校に一緒に行ったり魔女狩りをしたりした。モデルや魔法少女の辛さで心が折れそうになったときも、ずっとそばにいて私を支えてくれた。

中学を卒業し、同じ高校へ進学する際にとある事情でみかづき荘に住むことになった。そんな私生活まで一緒に過ごすようになったところと家族同然のような関係になるにはあまり時間はかからなかった。

高校に入ると同時にかなえという魔法少女に出会い、チームに加入した。かなえはバンドをやっていて私やこころも彼女の演奏を楽しみにしていた。かなえは魔法少女としては私よりも身体能力や魔力においてかなり高く魔女と一対一でも殴りあえるほど強かった。

一方学校では、私とこころとの仲良しの度合いを完全に超えている。『やべーやつ』とも学校の噂になるほど私達の仲の良さは広まっていた。だか、それも去年までの話だ。

去年に、ある事件があつた。チームの一員として半年以上戦つてきたかなえが魔女の攻撃から私を庇って動かなくなつてしまった。体に傷はほぼないのにまるで死んでしまったかの様な状態になっていた。かなえのすぐ横には半分欠けたソウルジェムが落ちていた。

そのとき、私はきゆうべえを問い詰めたことで初めて知つたのだ。魔法少女の秘密を、ソウルジェムが自分の魂であることを。その受け入れがたい真実を聞いて、仲間を失つたショックと未知の生物に人ならざるものに変えられたショックで心が壊れそうだった。同じことを聞いていたこころは何を思つただろうか。それを知る術は私にはない。ただ、隣には顔を隠して震えているこころの姿があつた。

次の日、こころは複雑な表情をしてみかづき荘を出ていつてしまった。それからは一切学校内でも学校外でも合うことはなかった。他の友人達からは何かあつたの？と聞かれるが私だつてわからない。むしろ私が知りたい。それから個人的に神浜市内を探しているうちに一ヶ月が経つた。今や私は心の支えを求めようになつた。そんな時から私はい前から少しずつ出会つていたみふゆに心を寄せて

一緒に過ごすようになっていった。

そんなところから連絡があったのが昨日。みかづき荘に明日帰ってもいいか？という突然の連絡だった。だが、私はすぐに了承した、心に花が咲くようなとても良いと気分になった。そこから彼女は続けてこう言った。「今一緒に活動している魔法少女もみかづき荘に呼んでおいてと」

私は「了解よ」と、2つ返事で返した。ここまでが昨日の話だ。

「やっちゃん？聞いていますか、やっちゃん？」

「ごめんなさい、今少し考え事をしていたわ」

「まったく、悩み事ですか？私で良ければ聞きますよ」

「いえ、たいしたことじゃないから大丈夫よ、心配しないで」

そう私が言ったときにちょうど☒ピンポン☒と家のチャイムが鳴った。私が行くから待ってて、そう言ってリビングにみふゆを残し玄関に向かうと予定より1時間ほど遅れて来たためかしよんぼりとしたところが立っていた。

第一話

久しぶりだなあ。みかづき荘の前で彼女は感慨深い様な申し訳ないような気分が入り混じった複雑な顔をしていた。みかづき荘のチャイムを鳴らすと「はい」という懐かしい声が返つて来る。自分がここに帰つて来た実感を感じていると、すぐにドアが開くと水色のワンピースを着たやちよが出てきた。

私はすぐさま土下座を決め込むと

「自分から言ったのに遅れてすいませんでしたー、さらにすぐに話を了承してくれてありがとうございますー！」

「いいわよ、別に貴方の頼みじゃない、それにしても一年前と何も変わっていないのね、私は貴方が連絡してきてからずっと心構えをしていたつもりなんだけど、やっぱりあなたがいてくれるだけで安心するわ」

そう言つて手を差し伸べてきたやちよの目には涙が浮かんでいた。この子初めて会つた時から心が弱いと思つていたのだが、なんだかさうに弱っている気がした。

私が立ち上がると彼女は我を忘れたように私に抱きついて来た、やさしく抱きつき返すとやちよは自我を取り戻したようで、焦つて離れて涙を腕で擦った。前言撤回やっぱちよつと強いかもと思つていと、やちよは当然の事ながら私に聞いてきた。

「ごころ、今まで何処で何をしていたの？あなたバイトもしてないし住むところもお金もなかったでしょう？」

「いやーごめん、実はあんまりこの一年のこと覚えてないんだよねー」「あなた自分のことでしょうか？なんで覚えてないのよ、だったらあなたどうやってこの一年間生きてきたの？体は大丈夫なの？ソウルジェムは濁つてない？大丈夫なの？」

彼女が質問攻めをしてくるが今のところ問題なく動いているし、ソウルジェムも驚くくらい輝いていて問題ない。一年間私が何をしてきたかは本当に分からないが最低限のことをしていたのは確かだった。

「そう言われても覚えてないものは覚えてないしなあ、まあ、無いって言っても、僅かに断片的な記憶はあるんだけどね例えば魔女と戦っているところとか、見知らぬ魔法少女を見ていたりとかかな」

「なんだか不思議ね、私としては一刻も早くその記憶を知りたいのだから」

「まあ時間がたてばきっとなんか思い出すでしょ」

「あなたが言うならいいけど、自分のことなんだからしっかりしなさいよ」

「へーい」

「貴方ね、まあいいわ、貴方が呼ぶように言っていた今の私の相方をリビングに待たせているから速く行きましようか」

「りよーかい」

適当に返事をする私は玄関から小走りで移動し、勢いよくリビングのドアを開けた。今日の本題がそこに待っているから。開けた先には休日にも関わらず水名女学院の制服を着た白い髪のおとなしそうでおしとやかないかにもお嬢様といった子が正座をして待っていた。初見で物事を決めるのは良くないことだと思っていながらも、期待はずれ感が否めなかった。

—————

やっちゃんも玄関から出ていく音がしてから10分ほど経った頃でしょうか、玄関が開き二人の足音が聞こえてきました。片方は早足で向かってきていて、リビングのドアが勢いよく開きました。そこから身長が150cmくらいの桃色の髪をしたちっちゃい女の子がいました。

やっちゃんもすぐに来て、机の周りに三角形ができるように座るとわたし達は自己紹介を始めました。

「私の名前は梓みふゆ、水名女学院の2年生です。趣味は友人とお話することです、よろしくお願いします」

「よろしく！今度は私の番だね、私の名前は神心ころっってって趣

味は特になし！、好きな食べ物とかも特になし！学校は神戸市立大附属学校だけど、今はどういう扱いになってるんだろ？まあいいか」

学校一年間行つてないって聞いていましたし、本人が気にしていないことが少し心配になってきました。が、やっちゃんがその話は後でねと言ったので。一旦置いておくことにしました。

それから少し雑談をしてから、彼女は不意に立ち上がり軽い口調で話始めました。

「私と一戦してくれない？」

「急に戦つてと言われましても、」

「まあ、いいじゃないみふゆ、いい機会よ戦つてあげなさい」

「やっちゃんがそう言うなら、」

「よし！決まり、場所はいつものでいい？」

「どこですか？そこ？」

「私とこころは知っているからついてきて」

「わかりました、」

こころは話しがわかるねえと言つて笑いながら玄関に向かい始めた。それに続いて私も不本意ながらトボトボと歩き始めることにした。

—————

みふゆを連れて10から15分くらいしたところで、廃墟のようなところについた。建設途中で計画が頓挫したのか100？50ぐらいの広々とした空間が広がっている。昔やちよとよくやっていた練習試合場所ということでルールも同じでやることにした。

ルールはお互いに20メートル離れたところからスタートで審判はやちよで勝敗は相手が降伏の意を示したら負けで合意した。

私としては1年間タッグを組んでいたやちよの背中をこれからも任せられるのかを審議する純粋にやちよに害が無いのかを見極める目的のためにこの戦いを挑んだのであった。

やちよが「開始！」と言い試合が始まった。様子見に先手を譲るが

攻撃はない。お互いににらみ合っていると急に背後から巨大なチャクラムのようなものが飛んできた。目の前にみゆふがいるのに、だ

「あつぶな！右頬かすったんだけど！」

「まだまだ、これからですよ」

「ぐぬぬー、」

咄嗟に今起きた一連の出来事を分析する。まず、彼女の声は割と近くから聞こえた気がした。そして今までの経験から固有魔法だろうとすぐに結論づく。例をあげるとするなら不可視やレポートのだろうか？はたまた催眠の類でもかけられたのか、そう分析している最中に考える隙きを与えないように第2波が来た。

目の前にいるはずのみふゆから全方位から攻撃が飛んでくる。この不可思議な現象を暴かなくては勝ち目はないだろうと、急所を外しながら落ち着いて考える。動かないみふゆ、いろんな方向から飛んでくる攻撃、近くから聞こえた声。この3つをよくよく考えてみると一つの結論が出た。

「固有魔法に頼りきった戦いをする子は私、あんまり得意じゃないんだよね」

「そんな事言われても、固有魔法こそ最大の武器なので頼らずにはいられませんよ」

「まあそうなんだよなー、だから負けるんだけどな、今のうちにみふゆの実力が見れて良かったわ」

「私が負けるような言い方をするんですね」

「勝負はついていると感心してるからね」

「強がりはいけませんよ」

「そう言われてもなあ、もうわかつちやったし」

そう言い終わった次の瞬間、彼女が目の前にダガーを2つ投げた。そのダガーは真っ直ぐに飛んでいき、どういう訳か急に180度回転して戻ってきた。彼女に向かって一直線に戻ってくるダガーは途中で止まった。数秒立たずにその場所みふゆの姿が現れた。アキレス腱が切れたようどうつ伏せの体制で自分の敗北を悔やんでいた。

「一応聞くけど降参する?」

「作戦がバレた上に動けなきや勝ち目は無いですし……」

「りよーかい、てことでやちよー終わったよ」

試合が終わり直ぐにみふゆのソウルジェムにグリーンフシードをあてて回復させた。魔法少女の体はグリーンフシードさえあれば直ぐに回復するから便利だなあ。いつもそう思う。

回復が終わったらしく、みふゆが急いで近づいて来て、なにが悪かったのかとか、なぜ作戦がバレたのかなどものすごい数の質問を投げてきた。私としては、分析して攻撃したとしか言えないし、徐々に動いて疲れて眠くなってしまったので、適当に返事を返した後、やちよにおんぶをせがむと簡単にOKがもらえたので遠慮なく背中に乗った。それを見たみふゆが物凄い形相でこちらを見つめていたがそんなのはさして気にならずに、やちよの心地よいぬくもりと適度な揺れで私の眠気はピークに達し即座に意識を手放した。

次の日、私が目を覚ますと昼の2時だった。ほどよい暖かさを感じ二度寝がしたくなるほどのいい天気であったが、空腹には耐えられず下のリビングへと向かう。ドアを開け、ふとテーブルの上を目をやると、一枚の紙が置いてあった。内容はこうだ。

『校長とはなした結果、明日から学校に復学できるようになるからいろいろ準備しておきなさい、あと私のクラスに入るようになったからいなかった時のエピソードでも考えておきなさいね』

あまりにも展開が速く、都合が良いため私はご都合主義かよくと叫んでしまった。割と響いたようで、周りの家からクレームが来たのはまた別の話。

—————

神浜市の夜。開発が進み昼間は人が集まりにぎやかな雰囲気だが夜になると一変し静寂が街を包む。みかづき荘がある〇〇区も例外ではなく静寂が包んでいた。

寝静まった街を起こさないように静かに、そして素早く移動する少

女の姿がそこにあつた。ソウルジエムを片手に持ち、慣れた手付きで魔女探し、殺す、まるで無駄な動きが一切なく、予めそうなることが決定づけられていたようにすら感じられる。目の前の魔女の死体を見て彼女は不気味な笑みを浮かべていた。立ち止まったのも束の間、次の瞬間にはまた移動し始めていた。

「見つけて殺す」言葉で言えば簡単だが、魔法少女にとって魔女との戦いは死闘である、実力が全ての弱肉強食の世界。そのはずなのだが、彼女は喜々として行っている、その実力は恐ろしいものがあつた。殺せば殺すだけどんどん顔がにやけていく、まるで一方的な殺戮を楽しんでるように。到底通常の精神で行っているとは考えられないため、魔法少女の間では（アブノーマル）と呼ばれ、恐れられていた。

ふと動きが止まる、目線の先には魔女と戦っている魔法少女がいた。どうやら防戦一方のようで状況はあまり芳しくないみたいだ。そこに乱入すると一瞬で魔女を蹴散らし、彼女はゆっくりと疲弊した少女に近づいて行く、好奇心と残虐性を合わせた淀んだ顔をが月に照らされる。そして一言こう言った。

今回の玩具は面白いといいなあ